

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

初月給のありがたみ忘れずに

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



研修を終え、五月病も乗り切った新入社員が先輩と一緒にやってきました。名刺の出し方もまだ不慣れで初々しく、こちらまで緊張します。彼から初月給の話を聞きました。

偉い方から「今回は社会保険や年金、財形もまだ引かれていないので、来月の給料より多い。両親や兄弟に何かプレゼントするように」との言葉を添えて明細が手渡されました。父親に欲しいものを探ねると、「何もいらない。お前の好きなものを買ったらいいぞ」との返事。

それでも、おしゃれな腕時計を贈ったら「『このほかに喜び、周りに見せびらかしている』と母親から聞いた」と目を輝かせて話しました。その様子に「うまく育っているな」と私までうれしくなりました。

自分の時のことを思い出しました。大学を卒業して勤めた会社は創業間もない頃で、売り上げも少なく資本金を取り崩している状況です。金庫番は株主の一つから出向している男性でした。

その彼が、札幌からやや離れた事務所として借り上げた住宅にやってきました。札幌や小樽に住む社員が寝泊まり

して働いている所です。

彼は正座し、ガバッと両手をついて「すまん。3日待ってくれ」と言います。社員が「明日支払いがあるので困る。いくらかでも回して」とどこ口々に言うど、「とりあえず10万だけある。必要額を言ってくれ」と続け、皆に配分します。私は学生結婚をしてつつましく暮らしていましたし、すべ何かを買う予定もなかったので「まあいいか」と思っていました。

これが社会人生活の始まりです。そこを辞め、転職して上京。その最初の給料日、職場にいる私に家人から朝一番

に電話がきました。

銀行で少し残っている預金をおろしたら、予想以上の残高が記載され、大変驚いたとのこと。給料日とは承知ですが、まさか朝一番に振り込まれるなどは夢にも思いません。何しろ前が前ですから。「へエ」とか「ほんまか」と返事していると、先輩が固唾をのんで私を見つめています。「何かあったか」と尋ねられ、「一部始終を話すと」「どんな会社なんだ!」と驚かれ、笑われました。

最初の給料遅配の影響でしょうか、どんなことがあってもあまり驚かなくなりました。何より給料のありがたさが身に染みんでいます。それ以来ずっと質素な暮らしを続けることができました。

件の若者はこれから30年も40年も勤めるでしょう。初月給のありがたさを忘れず、頑張ってもらいたいものです。